書籍のようなかたちになった文化的構築物だけでなく，パターン化された思考のプロセスとしての文化，挨拶のような日常的な行動様式に関連する文化の次元も含んでいる．ファシズムの時代が語られるのは，そのときの影響が現在もなお色濃く残っていることを示している．スクロペッタ氏のクロアチア語での挨拶に対する会場の“予想外”の驚きは，トリエステから来た“かれら”が“わたしたち”のクロアチア語を話すわけがない，という予想を逆に暗示している．国境域における深い亀裂を自覚した上での，複数の次元の文化コードへの挑戦である．

“わたしたちの歴史”は，「われわれ＝国民（ネイション）」という分類からは除外される人々，「国民の伝記」から削除されるはずの出来事の固有性を注意深く掘り起こし，紡ぎ合わせる．歴史家や郷土史家との協同，一次資料の公開，犠牲者全員の氏名・出身地・身分の明記，追悼会で上映された炭鉱労働のドキュメンタリーの放映は，「歴史への真摯さ」をめぐる継続的な対話としての「連累としての歴史」を追求する姿勢と重なり合っている[61]．“わたしたちの歴史”の内実は，地域で確かに生きてきたひとりひとりの人間の非代替性，地域の出来事の固有性の連累からなる，いわば場所の伝記（biography of the place）である．

追悼会はできるだけ「簡素に（sobrio）」行う[62]．2006年8月のポーラでの追悼会[63]でもそうであったように，団体旗などのシンボルは持たず，定型化した儀礼のパフォーマンスもできるだけ少なくする．この自覚的な選択により，居合わせたひとびとが「intimità［intimacy］―心の底からの交感・親交・親密さ」を介した交わりを自然発生的にもてるような場をつくりだそうとする．この「簡素な」追悼会でつくろうとする“わたしたち”は，「想像の共同体」としての「われわれ＝国民（ネイション）」でないことは明らかだが，かといって制度化された実体のある共同体とも異なる．それはV. ターナーのいうコムニタス（*communitas*）[64]に近いかもしれない．この社会関係の様式では，人々の日常生活を形作る社会構造，すなわち「政治的・法的・経済的な地位の構造化され分化された，そしてしばしば階級的な，体系」が一時的に停止する．そして「平等な個人で構成される未組織の，ないしは組織が完全でない，そして相対的に未分化な」社会の様式がつくりだされる[65]．この境界的な時期はほんの束の間であり，コムニタスは原理的に制度化を受け入れないものであるが，そのとき居合わせた人々は今まで堅固にあった社会構造が停止し，より高い水準で，差異が存在しながらも共に在るという社会関係を感じることができる．

なぜ「束の間」で「制度化できない」コムニタスを追求するのか．境界域・国境域においては，社会文化的な差異が政治的な差別化と重なって作用し，それによって社会関係が形作られ内面化してきたという根深さがある．ドリーゴ氏のような“国境を越えたつながり／つらなり”を担う人々のなかでも，葛藤，内なるアンビヴァレンスと苦闘しながら，集合的な営みを続けている．境界域・国境域の混交・混成は，それほどまでに根が深いといわざるをえない．したがって社会的に構造化されてきた社会関係を組み替えるには，そのための空間が必要になる．

ターナーはコムニタスを車輪の中心部にある空所にたとえてこう述べる，「中心は無であっても，それが車の構造上の機能には絶対に必要なのである」[66] と．コムニタスは，構造に「ゆらぎ」をもたらすような裂け目をつくりだす．そこから入り込み，構造を変容させるようなポテンシャルをその場にもたらすのである[67]．

こうしたいくつものコムニタスを創るという選択をし，それを集合的な経験として積み重ねていく．そのことが“差異を伴った共生（living together in differences）”をかたちにする源泉となりうる．そしてそれが，特定の社会関係における固有の差異を「共生のための差異（differenze per convivere）」[68] として認めあいしつつ，より高い水準の共同性を実現するための胎盤を形成していくことへとつらなっていく．境界域・国境域フロンティアの共存・共生および自治は，ここに一つの可能性があるのではないだろうか．

5.　結びにかえて

最初の問いに戻ってまとめよう．本稿の目的は，境界域・国境域フロンティアにおいて“わたしたち”がどのように構成されるかを，二つの相反するネットワーク――“ナショナル・ブロック”と“国境を越えたつらなり／つながり”――の諸団体が催す追悼式から明らかにすることであった．集合的アイデンティティの視点を援用しつつ，双方の“わたしたち”を対比的にまとめれば以下のようになる．

集合的アイデンティティの集合的なるもののプロセス：

a）　認知的定義：「フォイベの殉国士」 ― 「わたしたちがわたしたちの歴史を書こう」
　行為の志向性：「想像の共同体」の再構築　―　地域の非代替性，固有性の再構築
　行為のフィールド：政治的・組織的　―　文化的，日常生活

b）　諸関係のネットワーク：ブロック動員　―　ゆるやかなネットワーキング

c）　情動的投資：犠牲者感覚，敵対心　―　親密さ，アンビヴァレンスの縮減

集合的アイデンティティのアイデンティティ構成のプロセス：

d）　持続性：国民の伝記　―　場所の伝記

e）　統一性：「われわれ（ネイション）」，対立的関係　―　コムニタス，差異と対等性の関係

f）　承認：制度化　―　相互理解

これらの分析と考察により，境界域・国境域フロンティアとしてのヴェネツィア・ジューリア地域における「越境協力と差異ある共生」は，コムニタスを創りだすような集合行為のプロセスに，その可能性の在りかがあることが示唆された．

付記　本稿は，以下二つの共同研究と個人研究成果の一部である．新原道信（研究代表者）『21 世紀“共

成”システム構築を目的とした社会文化的な“島々”の研究』（科学研究費補助金･基盤研究（B）（1），2004－2006年度）；新原道信（研究代表者）『イタリアの国境地域と島嶼地域の“境界領域のメタモルフォーゼ”に関する比較地域調査研究』（科学研究費補助金・基盤研究（B），2007－2009年度）；鈴木鉄忠（研究代表者）『イタリア・スロベニア・クロアチア間国境地域の『国際協力と共生』可能性の質的調査』（科学研究費補助金･特別研究員奨励費，2011－2013年度）．本稿の執筆に際して，中央大学の新原道信先生からは調査と叙述のエピステモロジーに関わる助言を頂いた．古城利明先生からは論文全体に関わる丁寧なコメントと見通しをご教示いただいた．弘前大学の柑本英雄先生は，草稿に丹念に目を通してくださりコメントを頂いた．ここに記して感謝申し上げます．

注

1）　鈴木鉄忠「国境を踏み固める小道（2）―トリエステのイストリア故国喪失体験者団体の「回想の記念日」」『中央大学社会科学研究所年報』15号，2010年，129－147ページ．

2）　B. Anderson, *Imagined Communities : Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*（London : Verso, 1983）＝白石さや，白石隆訳『増補 想像の共同体』NTT出版，1997年，34ページ．

3）　同書，32ページ，56ページ．

4）　2008年9月から2010年9月までのトリエステおよびイストリアにおける個人調査および共同研究（付記，参照）のフィールド・ワークに基づく．主に参与観察とインフォーマルな聞き取りから得たデータをフィールド・ノートに書き留めた．そこからの引用は，記載の年月日およびフィールド・ノートと記した．

5）　A. Melucci, *Nomads of the Present : Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*（London : The Random House Century Group, 1989）＝山之内靖，貴堂嘉之，宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民』岩波書店，1997年．A. Melucci, *Challenging Codes*（Cambridge : Cambridge University Press, 1996）.

6）　古城利明『「帝国」と自治―リージョンの政治とローカルの政治』中央大学出版部，2011年．

7）　A. メルッチ，前掲書，1989＝1997年，77－78ページ．A. Melucci, op. cit., 1996, pp. 113－117. M. Diani and D.McAdam（edited）, *Social Movements and Networks : Relational Approaches to Collective Action*（Oxford : Oxford University Press, 2003）, p. 5, p. 11, pp. 313－314.

8）　A. Melucci, op. cit., 1996, p.116.

9）　A. メルッチ，前掲書，1989＝1997年，77－81ページ．

10）　新原道信「Ｉ自らを見直す市民の運動」矢澤修次郎編『社会運動』東京大学出版会，2003年，152－153ページ．

11）　A. Melucci, op. cit., 1996, pp. 68－86.

12）　川北稔「社会運動と集合的アイデンティティ―動員過程におけるアイデンティティの諸相」曽良中清司，町村敬志，樋口直人，長谷川公一編著『社会運動という公共空間』成文社，2004年，53－82ページ．

13）　A. Melucci, op. cit., 1996, p. 77.

14）　Ibid., p. 69.

15）　Ibid., p. 70.

16）　Ibid., pp. 70－71.

17）　フィールド・ワークでこの局面の動態を捉えるのは容易ではないが，手がかりとなるのは，アンビヴァレンスであるとメルッチはいう．普段は行為者の心身のなかで底流している内的な葛藤が，とりわけ社会的コンフリクトの瞬間に顕在化してくる．なぜならば社会的コンフリクトは，アンビヴァレンスを縮減する一つの方法だからである（A. Melucci, op. cit., 1996, pp. 80－83）．この側面に

ついては別の機会にあらためて論じたいが，故国喪失体験者のアンビヴァレンスにかんしてE. W. サイードが詳しく論じている（E. W. Said, *Reflections on Exile and Other Essays*（Cambridge Massachusetts : Harvard University Press, 2000, pp. 173－186）＝大橋洋一，近藤弘幸，和田唯，三原芳秋共訳『故国喪失についての省察1』みすず書房，2006年，174－193ページ.

18） A. Melucci, *The Playing Self : Person and Meaning in the Planetary Society*（New York : Cambridge University Press, 1996）＝新原道信，長谷川啓介，鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ―惑星社会における人間と意味』ハーベスト社，2008年，41－52ページ.

19） B. アンダーソン，前掲書，333ページ.

20） 同書，335ページ.

21） 同書，25－26ページ.

22） 同書，25－26ページ.

23） A. メルッチ，前掲書，1996＝2008年，77ページ.

24） このようなアイデンティティの見方について，オーストリア文学研究者の藤井忠氏から示唆を得た．藤井忠「断章，クラウディオ・マグリスのトリエステ（1）」『未定』第16号，2011年，141－167ページ．C. マグリス著，鈴木隆雄，藤井忠，村山雅人訳，『オーストリア文学とハプスブルク神話』書肆風の薔薇，1990年，参照は193ページ.

25） 古城，前掲書.

26） 同書，215－216ページ.

27） 新原道信「島嶼社会論の試み―「複合」社会の把握に関する社会学的考察」『人文研究』第21号，1992年，160－162ページ．M. Niihara, “Un tentativo di ragionare sulla teoria dell’insularità. Considerazioni sociologiche sulle realtà della società composita e complessa : Sardegna e Giappone”, *Quaderni bolotanesi*, n. 18, 1992, pp. 183－184.

28） 古城，前掲書，55－56ページ.「中央交易地帯（central trade belt）」は地中海からアルプスの東西を北上してライン川，ドナウ川流域までを含む一帯をいう．都市国家の形成と競合が盛んで中心がないため，近代国家の形成も遅れることになった.

29） 同書，176－178ページ.

30） 同書，同ページ.

31） 同書，178ページ.

32） 鈴木，前掲書，2010年，133－137ページ.

33） 古城，前掲書，187ページ.

34） 同書，同ページ.

35） 鈴木鉄忠「国境を踏み固める小道―「短い20世紀」以後のイタリア東部国境地域変容に伴うローカルの「再審」試論」『中央大学社会科学研究所年報』14号，2009年，注12参照.

36） 鈴木，前掲書，2010年，137－138ページ.

37） 鈴木，前掲書，2009年，156ページの出来事②を参照.

38） 同書，161－166ページ.

39） 同書，164－165ページ.

40） 2009年2月9日フィールド・ノート．傍点は引用者，以下同様.

41） 2009年2月9日フィールド・ノート.

42） この点を歴史家E. シェスタンは明確に述べている．E. Sestan, *Venezia Giulia : Lineamenti di una storia etnica e culturale*（Udine : Del Bianco editore, 1997［1947］), pp. 69－70.

43） T. モーリス－スズキ『過去は死なない―メディア・記憶・歴史』岩波書店，2004年，27－36ページ.

44） B. アンダーソン，前掲書，56ページ.

45）　2009 年 2 月 6 日フィールド・ノート．

46）　B. アンダーソン，前掲書，56 ページ．

47）　A. Oberschall, *Social Conflict and Social Movement*（Englewood Cliffs, N.J. : Prentice-Hall, 1973）, p. 125.

48）　Circolo di Cultura Istro-Veneta “ISTRIA”, *Scriviamo noi la nostra storia*, Quaderno No. 1（Trieste : il contributo della Regione Autonoma Friuli Venezia Giulia, 2009）.

49）　Circolo di Cultura Istro-Veneta “ISTRIA”, *ARSIA – ARSA 1940: 28 febbraio: il più grande disastro minerario d’Italia*（Trieste : il contributo della Regione Autonoma Friuli Venezia Giulia, 2007）. 本書はチルコロ・イストリアのホームページから入手できる（http://www.circoloistria.it/home.asp 2012 年 1 月 31 日アクセス確認）.

50）　Ibid., p. 5.

51）　Ibid., p. 3.

52）　Ibid., p. 3.

53）　Ibid., p. 3.

54）　IL PICCOLO，1940 年 3 月 1 日．

55）　例えば D. アルベリの「アルシア」の項目（D. Alberi, *Istria : Storia, arte, cultura*（Trieste : Lint, 2001）, pp. 1744 – 1746.

56）　2001 年のセンサスによると，アルボーナは，クロアチア語話者が全住民 12,426 名中の 9 割を超え，イタリア語話者は僅かに 3 %である Croatian census 2001. Press *Released Data*, Censuses and look for the table: *Population by Mother Tongue, by Towns/Municipalities*（http://www.dzs.hr/default_e.htm 2012 年 1 月 31 日アクセス確認）.

57）　R. Spazzali, *Pola operaia, 1856 – 1947 : i Dorigo a Pola. Una storia familiare tra socialismo mazziniano e austro marxismo*（Trieste : Circolo di cultura istro-veneta “Istria”, 2010）.

58）　2010 年 3 月 4 日フィールド・ノート．

59）　2009 年 3 月 4 日フィールド・ノート．

60）　2009 年 3 月 4 日フィールド・ノート．

61）「“歴史への真摯さ” とは，わたしたちのうちなる過去，周囲の過去の存在に対する注意深さから始まる，というのがわたしの主張である」（T. M. スズキ，前掲書，287 ページ，傍点は本文）.

62）　Cfr. L. Dorigo, *Nella memoria e nei ricordi la speranza*（Trieste : Circolo di Cultura Istro-Veneta ‘ISTRIA’, 2009）, p. 15.

63）　鈴木，前掲書，2009 年．

64）　V. W. Turner, *The Ritual Process : Structure and Anti-structure*（Chicago : Aldine Publishing Company）, 1969 = 冨倉光雄訳，『儀礼の過程』新思索社，1996 年（第 2 版）.

65）　同書，128 ページ．

66）「コムニタスは，その非構造的な特質でもって人間の相互関係性，ブーバーが das Zwischenmenschliche と称したもの，の “急所” を表象するが，“中心が無” ということでよく表象されるであろう」（V・ターナー，前掲書，174 ページ）.

67）「コムニタスは，境界性（リミナリティ）において社会構造の裂け目を通って割り込み，周辺性（マージナリティ）において構造の先端部に入り，劣位性（インフェリオリティ）において構造の下から押し入ってくる」（同書，175 ページ）.

68）　Cfr. A. Melucci, *Cultura in Gioco : Differenze per Convivere*（Milano : il saggiatore, 2000）.

補　遺

表－1　2009年トリエステ「回想の記念日」
団体のリスト

団体番号	団　体　名	団体種別	活動拠点	備　考
1	ヴェネツィア・ジューリア・ダルマツィア全国協会	市民団体	イタリア	故国喪失者団体
2	イストリア・コミュニティ協会			
3	世界ジューリア人協会			
4	〈故国喪失状態のフィウーメ自由コムーネ〉協会			
5	〈故国喪失状態のポーラ自由コムーネ〉協会			
6	〈故国喪失のザーラ自由コムーネ〉協会			
7	ジューリア・イストリア・フィウメ・ダルマツィア文化のマルチメディア資料センター			
8	イストロ・ヴェネト〈イストリア〉文化会（チルコロ・イストリア）			
9	イストリア・フィウーメ・ダルマツィア故国喪失者協会連盟			
10	国民同盟　兼・フォイベ殉死者委員会			
11	イストリア連合会－故国喪失状態のイストリア自由県			
12	イストリア文化州立研究所			歴史研究所
13	フリウリ・ヴェネツィア・ジューリア解放運動史州立研究所			
14	トリエステ市民大学	半官半民団体		法人団体
15	聖クイリーノ・ヴィロッティのジューリア・ダルマツィア文化会	市民団体		故国喪失者団体
16	アルボーナ・イタリア・コミュニティ		クロアチア	イタリア・マイノリティ団体
17	ロヴィーニョ・イタリア・コミュニティ			
18	アルボーナ博物館			
P19	フリウリ・ヴェネツィア・ジューリア自治州	行政・政治団体	イタリア	地方自治体
P20	トリエステ県			
P21	トリエステ自治体			
P22	ムッジャ自治体			
P23	アルボーナ／ラビン自治体		クロアチア	
P24	アルシア／ラシャ自治体			
P25	国民同盟政党		イタリア	政党
P26	イタリア政府			政府

注記：団体番号に関して，無印の場合は市民団体，頭文字がＰの場合は行政・政治団体（Polity）を示す．
出所：表－2に掲載のイベントに関与した団体を参照し，筆者が作成した．

表－2　2009年トリエステ「回想の記念日」
イベント

イベント	日付	イベント名	団体提携形態	参与団体【表－1に対応】	イベントデータの典拠
1	2/2	教員研修①「ヴェネツィア・ジューリア史と回想の記念日」	単独	2	『イル・ピッコロ』('09/02/02)
2	2/6	イストリア・フィウーメ・ダルマツィア文明博物館落成式	ナショナルな協働	12, P21, P25	『イル・ピッコロ』('09/02/05, '09/02/07, '09/02/08),『人民の声』('09/02/04, '09/02/05, '09/02/07)
3	2/7	記者会見および絵画発表会「ボニファッチョ神父へ献じられた絵画作品発表」	単独	1	『イル・ピッコロ』('09/02/08),『回想の記念日』
4	2/9	追悼式典「フォイベ殉死者と故国喪失者を記念した献花」	ナショナルな協同・協働	4, 5, 6, 10, 11, P20, P21	『イル・ピッコロ』('09/02/10)，自治体冊子,『回想の記念日』
5	2/9	追悼式典「G. ミケレッティへの記念顕彰碑への献花」	ナショナルな協同・協働	4, 5, 6, 10, 11, P20, P21	『イル・ピッコロ』('09/02/10)，自治体冊子,『回想の記念日』
6	2/9	教員研修②「ヴェネツィア・ジューリア史と回想の記念日」	単独	2	『イル・ピッコロ』('09/02/09)
7	2/10	追悼式典「国立記念顕彰碑バゾヴィッツァのフォイバ」	ナショナルな協同・協働	4, 5, 6, 10, 11, P20, P21, P25	『イル・ピッコロ』('09/02/11)，自治体冊子,『回想の記念日』
8	2/10	記念式「G. ナポリターノ大統領承認のフォイベ虐殺者11名の親族への寄託」	ナショナルな公式行事	P20, P21, P26	『イル・ピッコロ』('09/02/11)，『回想の記念日』
9	2/10	書物発表会および特別写真展示会「イタリア人という選択」	ナショナルな協働	10, 15, P19, P20, P21	自治体冊子,『回想の記念日』
10	2/10	オペラ・コンサート「ヴェルディ――記憶の夜に」	ナショナルな協働	9, 10, P20, P21	『イル・ピッコロ』('09/02/10)，自治体冊子,『回想の記念日』
11	2/11	書物発表会および討論会「オーストリア・ハンガリー帝国からフォイベへ」	単独	13	『イル・ピッコロ』('09/02/08, '09/02/11)，『回想の記念日』
12	2/11～13	選挙「トリエステ市民大学次期役員選挙」	単独	14	『イル・ピッコロ』('09/02/08, '09/02/12, '09/02/16)
13	2/16	教員研修③「ヴェネツィア・ジューリア史と回想の記念日」	単独	2	『イル・ピッコロ』('09/02/16)
14	2/20	会合「今日、故国喪失者であるとはどういうことか」	単独	2	『イル・ピッコロ』('09/02/21)，『回想の記念日』
15	2/21	記念式典「ノルマ・コセット記念顕彰碑建立」	ナショナルな協同	1, 4, 5, 6, 9, P25	『イル・ピッコロ』('09/02/22)，冊子『回想の記念日』
16	2/28	追悼式典「アルシア炭鉱事故から69周年追悼会」	越境的な協同・協働	8, 16, 18, P23, P24	『イル・ピッコロ』('09/03/03)，『人民の声』('09/03/02)
17	3/2	教員研修④「ヴェネツィア・ジューリア史と回想の記念日」	単独	2	『イル・ピッコロ』('09/03/02)
18	3/4	書物発表会「イストリア半島・クイエト渓谷」	越境的な協同	8, 17	『人民の声』('09/03/09)
19	3/13	討論会「引き出しのなかの記憶」	ナショナルな協働	8, P22	『イル・ピッコロ』('09/03/13)

注記：前拙稿では14イベントを掲載したが，ここでは19イベントある．それはイストリア・コミュニティ協会（団体②）の単独イベント五つを追加したからである．なお全体のネットワークの形状には以前と変化はない．
出所：表中「イベントデータの典拠」を参照．これらのデータから筆者が作成した．